

福知山公立大学 2023 年度卒業式・学位授与式  
式辞

地域経営学部地域経営学科 80 名、医療福祉経営学科 23 名、情報学部情報学科 88 名、合計 191 名の卒業生のみなさん、ここに晴れてご卒業を迎えられましたこと、まことにおめでとうございます。卒業生の保護者のみなさまも深い喜びを感じておられることと思います。ここに、福知山市長大橋一夫様のご臨席を賜りながら、このように卒業式・学位授与式を挙行できますことをともに喜びつつ、教職員を代表してお祝い申し上げます。

さて、本年は情報学部から初めての卒業生を送り出すことになり、福知山公立大学にとって一つの区切りとなる卒業式となりました。4 年前に、現在の社会のあり方に深く大きな影響力を持っている情報学という学術分野において有為の人材を育てるという使命を自らに課したわけですが、こうして情報学部から最初の卒業生を社会に送り出すことができたことを本当に喜んでおります。情報学部の卒業生のみなさんは、入学時に一人の先輩もいない教室で学び始めなければなりません。学びの羅針盤となった教職員の努力に敬意を表したいと思いますが、なにより卒業生のみなさん自身が不安とさまざまな困難を乗り越えて今日の日を迎えられたことに、深い尊敬の念を覚えるものです。

また、ここにおられるみなさんが本学に入学された 2020 年 4 月は、新型コロナウイルス蔓延に対する緊急事態宣言が発出されたまさにその月でした。入学式も中止せざるをえませんでした。昨年 5 月にウィルスが 2 類から 5 類に変更されるまで、みなさんの大学生活のほとんどの時間はこの感染症とともにあったこととなります。前半の 2 年間には、大部分の授業をオンラインで実施せざるを得ませんでしたし、後半の 2 年間も勉強だけでなくみなさんのキャンパスライフ全般が大きな制約を受けることになりました。大学生として大きな成長を遂げる時期にあったみなさんにとって、この状況はほんとうに不運・不幸だったと言うべきです。しかしながら、きわめて稀有な経験を持つことになったとも言えます。人生のそれぞれの時期の経験は一回限りの、自分ではどうすることもできないものですが、その経験をその後の人生の出発点としてどのように活かしてゆくのかを決めるのは、みなさん一人ひとりなのです。コロナウィルスとともに青春を過ごした世代として、みなさんが独特の輝きをもって社会をリードされることを期待したいと思います。

さて、本日のご卒業によってみなさんの多くの方は、人生における学校生活、学びの時期に区切りをつけることとなります。義務教育と高等学校をへて、本学が学びの「終着点」だと言えるかもしれません。しかし、本当はそうではないと思います。なぜなのか。高校までの学びとは何が正解であるのかがすでに確定している問題を自分で確かめることでした。その総決算が大学入試でした。それに対して、大学での学びの中心あるいはその目的は、何が正解なのか分からない問題に解答を与えようとすることでした。もちろん、大学で学んだ

学問には、高校までと同様に、これが正解でありそれを身に着けなければならない基礎的知識というものもありました。ですが、大学ではその学問の内部においてさえ、未知で何が正解なのか分からないことがたくさんあるということ自体をも学んだはずです。

このような大学での学びのあり方にふさわしいと考えて本学で実施してきたのが、「地域協働型教育」です。地域経営学や情報学という学問を学ぶための入口は、それぞれの学問においてすでに分かっている一般的知識が書いてある教科書ではなく、地域、具体的には福知山市や北近畿という地域が直面している個別的な課題に触れることだと見なしてきたのです。経済活動の低迷であったり、福祉分野の人材不足であったり、水害のような災害への有効な対応策であったり、地域の具体的で個別的な問題を確認しそれにどのように対処すべきなのかを考えることを出発点として、みなさんは本学での学びを始めたのです。そこから地域経営学や情報学の学問としての理論の学修に進んだわけですが、学問それ自体、またその学修というものが具体的な地域課題の解決のためにあるものだという視点を見失わないことが大切だと考えてきました。

また、この教育は地域の多様な人々との「協働」であるとも考えてきました。実際には、何らかの課題に長く取り組んでこられた地域の人々から「教えていただく」という側面が強かったかもしれません。しかし、学生諸君一人ひとりがこの地域の課題を共有し、その解決のために学問のちからをもって地域の人々とともに働くという本学の地域協働型教育は、みなさんの今後の人生に大いなるちからとなると信じております。

卒業されるみなさんの多くは、これからいわゆる「社会人」としての「生きる現場」を持つこととなります。一般の企業であったり、病院であったり、公務員として行政府であったりするでしょうが、それぞれがみなさんにとってのいわば「地域」なのです。目に見える関係にあるさまざまな人々が協働して生きる現場が「地域」です。そして、そのみなさんがこれから生きる現場は目に見える具体的で多様な課題を抱えているでしょう。本学での4年間の地域協働型教育は、これからみなさんが生きてゆくそれぞれの「地域」「現場」で活躍するための土台であり雛形となったはずです。このことに自信を持っていただきたいと思えます。

しかし他方では、これからみなさんが生きてゆく「地域」「現場」の課題を解決するには、本学で学んだ学問や知識・スキルだけでは不十分だということに、おそらくすぐに気づくことになるでしょう。自分が学んだ学問そのものが急速な進展を見せるものだというだけではなく、眼の前の地域課題の解決のために必要で求められる学問・知識・技術を自分が知らないことを否応なく知ることになるからです。自分が生きる現場の抱える課題に本当に立ち向かおうという志を持つならば、その課題解決のための正解がすぐに見つけられないとしても、必要なことを学び続けなければならない。その意味で、今日のご卒業は学びのひとつの区切りではありますが、決して学びの終わりではないことを忘れないでほしいと思えます。

ご卒業にあたり、もう一つだけ申し上げておきたいことがあります。新型コロナウイルスのことは先ほど申し上げましたが、みなさんの在学中には2022年2月のロシアのウクライナ侵攻、昨年2023年10月のイスラエルのガザ侵攻が起きました。また、今年の元日には能登半島地震が発生し、大きな被害が出ました。そして、コロナウィルスも、遠い国の戦争も、地震も、自分ではどうすることもできない出来事であり受動的に受け止め傍観するしかないと思いがちです。「地域」の視点を重んじる本学の教育からすれば、地域と直接関係しないように見える問題に対しては傍観という態度を取ることは自然なことだと捉える人もいるかもしれません。ですが、そうではありません。なぜなら、一つには、地域の課題とまったく大きなスケールの課題とは、現代においては分かちがたく結びついているという事実があるからです。地球規模の温暖化と由良川の氾濫との関係を見ればすぐに分かることです。これはグローバリズムという主義主張・思想の問題ではなく事実の問題ですから、地域を現場として仕事をしようとする場合にも、できるだけ大きな視野から地域の課題を考えることが当然必要とされるのです。

もう一つには、無関心や傍観は、民主主義社会のなかに生きるわれわれにとって本質的に危険な態度・姿勢だからです。自分の生活には縁遠いように思える世界的な「大問題」は、身近な地域の課題以上に正解の見えない問題でしょう。それでも、誰かが決めた社会のありようのなかでただ受動的に生きることを、民主主義は善しとしないのです。正解が見えない問題であるにしても、それから目を背けずに関心を持ち続け考えなければならない社会に私たちは生きているのだということを、あらためてみなさんに向けて強調しておきたいと思えます。

本日卒業されるみなさんのうち、15名の方々は来月に設置されます大学院地域情報学研究科修士課程に進学されます。このような卒業式となったことも、大きな喜びとしております。とはいえ、先ほども述べました通り、本学を去られる卒業生のみなさんにとっても、卒業は学びの区切りでしかないことは、大学院に進学される方と何ら変わりはありません。これからも学び続けるためのちからが、福知山公立大学での学びによってみなさんに確かに備わっていると信じ、みなさんのお一人おひとりが豊かで充実した人生を歩まれることを願ってやみません。

本日のご卒業、本当におめでとうございます。

2024年3月22日

福知山公立大学学長 川添 信介